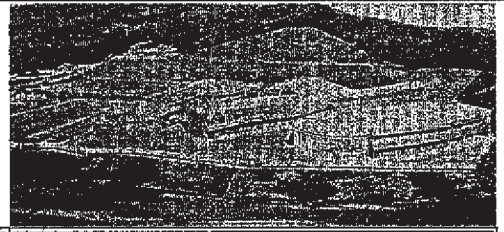


佑 啓



ふる里学会・和田館 〒290-0265 安房郡和田町黒岩 1196-1
tel 0470-40-7227 mail fgakusya@wada@blue.ocn.ne.jp

社会福祉法人 佑啓会
<http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/>
発行者 里見 吉英 編集者 三股 金利

ふる里学会 〒290-0265 市原市今富 1110-1
tel 0436-36-7611 mail fgakusya@seach.ocn.ne.jp

尾瀬沼は絶景だったが

里見 吉英

赤や黄色に染まった木の葉が、さし込む太陽の光に、キラキラと輝いている。三十年振りに訪れた尾瀬沼への道すがら、山々から逃れ、秘湯に行こうと思いつき、若い職員数名と一泊二日の寸暇を楽しんだ。

思えば前回は水芭蕉の時期に訪れたため、ラッシュアワーのような状態でとても自然を楽しむなどという気分になれなかったが、今回は尾瀬沼が閉鎖直前の為、たまに品のいい老夫婦に出会うだけで、自然に身をゆだねるといえるのはこれだと思えるような雰囲気を感じることができた。更に携帯電話もつながらないということもよい。近くの温泉に宿をとり、浴衣に着替え、

おいしい山の幸、こだわりの地酒、うーん、これは最高だとひとり悦に入っていると、昼間の二十キロハイキングが体にこたえたのか、職員の口もすぐに滑らかなり現実を引き戻された。「えんちよ、最近会議でのえんちよの話、金の話が多いんですよ。そんなに補助金が少なくなるんですか」

「えんちよ」

「今までの会議といえばその子、はこういう対応をしるとか、そのグループはこうしろという話が多かったのに最近はずいぶんよ」

「そうかなあ」

「だって契約制度の話をしてくたした時も、最後はこの制度ではこういう金額でなんて最後は金でしめくくるんだもの」

「うーん、たしかにそうかもいれないなあ。でも学舎は多少影響を受けてもたいじょうぶだから心配するな、と言ってるじゃん」

「でも現場の間ではリストがあるんじゃないかと、けっこう話題になってるんですよ」

「そうか、心配していたのは利用者、家族だけかと思つたら君たちもそうだったの」

「あたりまえですよ、現場は丁寧に説明されればされる程、裏に何かあるんじゃないか、なんて考えてしまうんですよ」

「ハハハ、考えすぎだよ」

「でも」

「更に酔いがまわり、度って本当によくなったの。対等な関係とか、選べるサービスとか言ってるけど」

「難しいところだね」

「だって対等になれにくいところ、この障害の難しさがあるんじゃないですか。きれいごとばかり先行しているような感じがするんですよ」

「うーん、だね」

「もつと本音で物言う人いないんですよ、この世界に」

「まあまあ、ちよつと、鮎の塩焼き焦げちゃうから食べようよ、みんな」

「そうさそうさ、食べよう食べよう」

他の面々はこんなとこまできてまた仕事の話をしているふたりにうんざりといったところ。

しかし始まった止まらないのが宴会の話題。

「だいたい契約結ぶたつて一体誰とするんですか」

「その人の最も信頼する人となつていくけど」

「信頼する人は誰が選ぶんですか、本人ですか？」

「まあまあ、その辺はフアジーにしておかないとこの制度自体成り立たないんだよ」

「契約書とか重要事項説明書とか、なんか不動産取引みたいですね」

「そうかねハハハ」

「契約書って誰がつくるんですか」

「施設側だよ」

「へえ、聞けば聞く程どこか変な気がするけど」

「正直、変なところが多いのは確かだよ。知的障害という障害に對する理解度が低かったところから走り出しちゃって、止まらなくなつて、戻れなくなつて、いろいろ取り繕つてるといふ感じがな」

「じゃあ最初に戻して、考え直せばいいじゃないですか」

「ここに至つたら総理大臣だって無理だよ、ハハハ」

「しかし」

「でもはじまつてしまつて以上、我々現場はよりベターな方向へ進めていくことしかないと思うね、前向きにね」

「でも施設にはかなりの規制がかつたままなんて聞きますけど」

「そういう面もあるね」

「だつたら制度が変わつたら、あれもやろう、これもやろうなんて話してあつていたこともできにくくなるんじゃないですか」

「今までよりは多少よくなると思つて、まだ始めてみないと何ともいえないところかな」

「ああ何か疲れちゃつた、寝よう寝よう」と言つたと思つたらもう高いびきが聞こえてきた。

そう言えばこの前、厚労省の専門官が「私は専門ではないので」などと言つていたのをふいに思い出した、なんだかやりきれない思いのままもう一度温泉につかり床についた。

翌朝、「えんちよ、せっかく仕事忘れにきたんだから、帰る途

中にいい露天風呂があるから入つていきましようよ。混浴ですよ。紅葉も見ごろですよいいですよ」

もう夕べのことは忘れたかのよう、さすが切り替えが早い。階段をえんちんと降りた川沿いにそれはあつた。あたりはもみじ狩りの人でにぎわつていた。

「ところで脱衣場はどこだい」

「ここですよ」

「ここっていつたつて、これ階段の途中じゃないか」

「そこがいいんですよ」

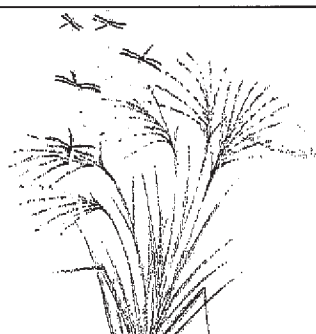
「いつて、みんなさつさと脱いでザブーン、ザブーン。入つてみるとぬるかつた。あがつてみたら、体がどこかゆいような感じがした。」

「えんちよ、よかったでしょ」

「うん、だね」

帰り道はまだ携帯が鳴り出し、現実に戻る助走に入つていた。

(理事長)



「親の願い」

洲上 妙子

子供達が一才半健診や三才児健診、子供相談等の場で、発達の違いや障害を疑われたりすると、どこで仕事をし

てきました。全く予期せぬ事態に戸惑い、子育てが不安で途方に暮れ、何とかして「障害」とは無縁でありたいと、その事を否定してくれる人を探したり、病院を「はしこ」したり、「相談なんて嫌だ」「余計な口出しはされたくない」「そう簡単に認めるわけにはいかない。放っておいて欲しい」というのが本当の気持ちなのです。早い時期に障害を決定付けることには疑問を持つのですが、言えるのは「幼いうちにやるべきこと」は実施しておいた方が

良いと確信しています。胸中はどうも計り知れないけれど、子育ては待たないのです。言葉の受け取り方は人それぞれで、気持ちの行き違いで「障害児と言われた」「自閉症と言われた」と取り返しのつかない方へ進んでしまうこともあります。障害という言葉の重さに傾然とし、技量のなさを痛感させられます。初めて通った他人に自分の子供をとかく言われるのは心外なので、親は子供ばかりでなく、自分も受け止めてくれる人がいて欲しいのです。

療育機関に関わってくると安心し落ち着きますが、殆どの親は子供の

「発達」に期待し、普通の子になって欲しいと思うのです。「食事のこと」「排泄のこと」「着脱のこと」や生活習慣を獲得できるよう働きかけていくと、「オムツがとれた」「靴がひとりで履けた」「ひとりでおしっこが出来た」と子供の変わり様に一喜一憂しながら、協力的な姿勢が療育効果を加速させていきます。

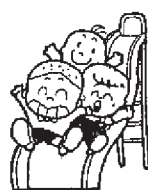
身のまわりの事が整ってくると、「子供集団」への参加を望み、幼稚園、保育所へ転園となり、幼児期の「親の願い」はひとまず達成されます。障害のあるなしに関わらず、子供を思う気持ちは皆同じです。

次は就学です。親の気持ちは再び不安定となり、「何で普通の小学校に入学させてくれないのか」小学校入学は当たり前のことなのです。親の選択に委ねます。ちよつと大変かなと思われ

る子供も、うまく学校に適應し、成長を見せられることもあります。決定的な言葉や怪しみな言葉は言えませんが、学年が上がっていくと、「将来への不安」が膨らみ、卒業後はどうしよう。途中で学校をやめて入所施設に入れた方がよいのではないかと、どこがうちの子を一番良く見てくれるだろうか。と情報の収集に力を注ぐことになります。

ばせてもらいながら、私の独り善がりな思いが届くよう、お手伝い出来ればと思います。

(洲上さんは二十六年間、きつあゆみ園・きみつ愛園という身体不自由児施設と知的障害児の幼児通園施設で働いており、今年4月半ばより、ふる里学舎に専任員として来て頂いています。)



「今が良ければ...」

本郷 宏治

学舎に入ってから四年と七ヶ月、バレエを始めたのも四年と七ヶ月前...

小学校三年から十二年間サッカーをしており体を動かすことが好きだった私は、ふる里学舎にこんな活動があったことに驚き、また、素直に喜んで

いた。入社後、間もなく先輩から「本郷君、バレエ出来る?」「出来ません!」「今日の夜六時からバレエやるから来てね。」「もちろん行きま

す。」「今から思い出しでもなんぞなんぞにアホみたいに張り切っていたのだらうと思うほど気が入っていた。

先輩とも早く打ち解けたいしバレエをする事も楽しみにしていたが、それは今まで体育の授業でしかやった事がなかったの、みんな上手かったらどうしようといった一抹の不安も

あった。行ってみたらなんて事ない。今となっては言えるが(今でも言える事じゃないかも)、正直端から見ても上手いといえるような人は見当たら

ず、安心した。だからといって自分が上手いわけではなく、目を追つても一向にボールが手につかない...。「な

んや、おもしろくないなあ。」「新人のくせに協調性がなく、サッカーをやっていたのにチームワークというものをなくしていた私は、徐々に顔を出さなくなっていた。

バレエボール大会が目前に迫ったある日、当時の主任に呼ばれた。「何で練習に来ないんだ。」「試合にも出られそうにない私は「あんまり面白くないんで...。」「そんな事を言っ

てしまった。この言葉で主任の目の色が変わった。それから数十分、いや数時間の「有り難い言葉」を頂いた

が、その時の状況は皆さんの想像にお任せします。それから何日、いや何十日とその言葉を頂いておきながら何だか、結局昨年まで行ったり行

かなかつたりを繰り返していた。ここでふと思う。なんで今年から練習に出るようになったんやろう?それは多分チームのキャプテンになっ

たから。更と思う。それだけよいにしても、上手いと言われるような実力を持っていない自分がなんでキャプテンになったんや?そんな深い意味も考えず、「いいです、やりますよ」と快諾。」「キャップ」そう言われながら「らしい」事もせずに進めてきては

ム内でも年代的に丁度中間辺りだし、何かにつけて先輩も後輩も言い易い立場なのかもしれないし、実際にみんなは言いたい事を言ってくる。(特に

「係長が...」そんな立場やら性格やらを見越して選ばれたのだと思う。昨年までは良い意味でも悪い意味でも「おふざけ」が許されなかった雰囲気があった様な気がする。それが、今では結構いい雰囲気が出来たと自負して

いるし、みんなもそう感じてくれていると勝手に思っている。もちろんその雰囲気は自分が作れるものではなく、みんなが一丸となりひとつの目標に向かう頑張りのおかげだと思う。いい事ばかり書いているが、愚痴りたい事もいっぱいある...。が、また何言われるか分からないので、この辺で終わりにしときます。大会での優勝を願いつつ...



(指導員)

編集後記

去る十月八・九日にゆうあいピックソフトボール大会が行われ、今年も無事優勝旗を守ることができました。

今年からソフトボールチームも、市原と和田浦に分かれての練習でしたが、週末に合宿のような合同練習を行い、一層チームワークが深まったようです。職員も寮生さんに負けないように、絆を深めつつ...

佐啓47号をお送りします。

(佐藤 礼奈)